

【研究ノート】

## 漢族の元宵節の儀礼における神柱の役割

—中国青海省A村の事例から—

上原 周子

### 1. はじめに

本稿では、中国青海省A村における漢族の元宵節の儀礼について事例報告を行い、その儀礼における神柱の役割を分析、考察する。また、その結果をもとに、『北海道民族学』第3号で発表した「中国青海省海東地区化隆回族自治州における漢民族の儀礼棒に関する事例報告」（上原2007）の内容を再検証し、更新する。その意味において本稿は、前回記事の継続研究として位置づけられるものである。なお、本稿では前回記事のように儀礼棒ではなく神柱と表記する。前回記事の調査では話者の発音が明確ではなく、また話者自身が神柱という中国語表記に自信が無いとのことだった。そのため、他の表記である可能性も考え、神柱と安易に表記することを避けた（上原2007: 47-48）。その後、複数の話者に調査を行い、中国語表記が神柱であることを確認した。ゆえに本稿では儀礼棒ではなく、神柱を用いることとする。

前回記事では、オシラサマ<sup>1</sup>の研究に新たな活路を見出す資料的価値を有するものとして、化隆回族自治州の3つの村における聞き取り調査をもとに事例報告を行い、神柱の形態や用途の特徴を指摘した（上原2007）。しかし、前回記事の元となったデータは、全て聞き取り調査から得たものである。よって、それをもとにして行なった分析や考察は実証性に欠ける部分があると思われる。実際に前回記事と本稿における調査結果には相違が見られ、自身の調査不足、調査不備も露呈した。そこで、本稿では中国青海省A村の漢族による元宵節の儀礼を対象として行なった参与観察の結果から事例報告を行い、その儀礼における神柱の役割を明らかにする。そして前回記事で指摘した化隆回族自治州の3つの村における神柱の特徴について再検証し、更新を試みる。また、前回記事における先行研究の検討では、中国の土族やモン族、タイ族の間に中国語で神柱と称される柱が用いられる事例のあることを提示し、化隆回族自治州の3つの村における神柱とは「形態においても、その用途や用いられる場面においても、かなりの相違がみられる」（上原2007: 47-48）と指摘した。これについても、神柱の特徴を再検証および更新した上で、もう一度検証してみたい。ちなみに、中国青海省A村は前回記事の4-2で報告した村と同じであるが、本稿と前回記事では戸数に違いが見られる。これは本稿での数値が正しいのであり、再調査で確認した。前回記事のデータに不正確な点があったことを、ここにお詫び申し上げたい。

以下、本論ではまず、中国青海省A村の漢族による神柱への信仰について概説する。次に、A村の関帝廟で行なわれた元宵節の儀礼に関する参与観察の結果を報告し、その儀礼における神柱の役割を明らかにする。最後にそれを踏まえ、前回記事で指摘した神柱の特徴を再検証し、更新する。また、前回記事の先行研究の検討における指摘についても再検証を行う。なお、現地での調査は2011年2月に実施した。調査方法は主に参与観察、聞き取りを用いた。聞き取りではチベット族の通訳者を介し、データを収集した。その際、使用した言語は中国語、日本語、チベット語である。

## 2. 中国青海省A村の漢族による神柱への信仰

### 2-1. A村の概要

A村は中国青海省東部に位置する多民族村であり、漢族、チベット族、回族が混住する。総戸数およそ60戸のうちチベット族が2戸、回族が4戸、漢族が50戸以上を占める。主な生業は農業であり、小麦や油菜、馬鈴薯、大豆などを栽培する。また、農閑期には出稼ぎにより現金収入を稼ぐ。出稼ぎでは都市部での商売や建設現場等での職に従事する。18世紀以前のA村はチベット族のみによって構成されており、1940年代までは隣のB村とともに1つの村を形成していた。しかし、20世紀に入り、漢族の人口が次第に増加したことによりB村から分村、その後、A村だけで独立した村を構成するようになった。そうした歴史的な背景もあってか、A村とB村の間では現在も往来が頻繁にみられる。また、両村の漢族が共に宗教活動を行うのみならず、B村のチベット族の宗教活動に参加するA村の漢族もみられる。

### 2-2. 神柱および神柱への信仰の内容

#### (1) 神柱の形態と用途

A村では100年前にはすでに神柱が存在していたと聞く。文化大革命の際、神柱が祀られていた関帝廟<sup>2</sup> および廟内の神像は軒並み破壊されたが、村の人々の協力もあり神柱だけは難を逃れた。改革解放後、新たに修築された関帝廟に再び神柱が安置され、廟の祭日行事や元宵節の儀礼等も復活した。廟には現在、財神、関羽、諸葛亮、関羽の息子である関平、関興のほか、チベット族が信仰するアニ・ガル (*a myes dkar po*)、アニ・ユラ (*a myes yul lha*) という土地神<sup>3</sup> も祀られている。

A村の神柱には大小2本ある。大きな神柱は全長約50cmで廟の神前にある専用の木箱に安置されている。小さな神柱は全長約30cmで安置するための箱は無く、普段はむき出しのまま壁に立てかけられている。両神柱とも棒先を少し残したところから赤や黒、ピンクの布が被せられている。また、棒の形態は多角形であり、大きな神柱の表面には関羽、関羽の息子二人、財神、諸葛亮、アニ・ユラの名前が書かれている。次項で登場するC氏によれば、儀礼や行事の際、それらの神格が神柱に依りつくのだという。小さな神柱は廟外への持ち出しが可能であるが、大きな神柱については禁止されている。また、神柱は大小で用途が異なる。例えば、大きな神柱は天候のコントロール、小さな神柱は病気治療に用いられる。

#### (2) 法師について

法師は儀礼や行事の際、神柱を動かしながら場を司る役割を担う。法師になるのに特別な修行は無く、世襲制でもない。現在法師を務めるC氏は40代の漢族の男性であり、改革開放直後にA村内で選出された。普段は農業に従事する一般の農民である。C氏によればその選出は当時、次のように行なわれた。著名なチベット仏教寺院の活仏<sup>4</sup> がA村に来て、関帝廟に村の人々を集めた後、神柱を各人に順番に手渡し、その人物が法師に相応しいかどうかを神柱に尋ねた。C氏に手渡されたとき、神柱が震え出した。そこで、C氏が法師として選出されたのだという。それから約30年、C氏はA村の法師を務めてきた。ただ、法師も含めA村の人々は、儀礼や行事の際に重要なのは神柱であり、法師ではないと主張する。そのため、例えば病気治療の儀礼に神柱を用いる際、法師がA村に不在であれば、他の人が代理で用いることができる。

### (3) チベット文化の影響

上記した法師の選出も含め、A村の漢族による神柱への信仰にはチベット文化の影響が指摘される。例えば3、4年に一度、C氏は前出のチベット仏教寺院に神柱を持っていき、活仏に祈祷や読経をしてもらう。また、小さな神柱はチベット仏教寺院の活仏が作製したものだと伝えられている。さらに、次章で報告する元宵節の儀礼では以前、マニ (*ma ni*) やジョマ (*sgral ma*) と称されるチベット仏教の経を老人たちが読経したと聞く。こうしたチベット文化の影響は神柱への信仰のみならず、関帝廟にもみられる。例えば、関帝廟には、前述のとおり、チベット族が信仰するアニ・ユラやアニ・ガルと称される土地神も祀られている。

しかし、A村では漢族の元宵節の儀礼にチベット族は参加しない。A村のチベット族は隣にあるB村のチベット族とともに宗教活動を行っており、元宵節はB村で読経活動を行うのである。ただ、元宵節以外の漢族による儀礼や行事にもチベット族は参加しない。それどころか、漢族の儀礼や行事の騒がしさのために、A村やB村のチベット族が抗議したという話も聞く。参加しないにも関わらず、チベット文化の要素がみられる理由については今後、より詳しい調査が必要であろう。また、回族はイスラム教を信仰するため、チベット族同様、漢族の儀礼や行事に参加することはない。

## 3. A村における元宵節の儀礼と神柱の役割

### 3-1. 事例報告—儀礼における神柱の役割

中国では農曆<sup>5</sup> 正月 15 日は元宵節と称され、中国各地で爆竹が鳴らされ、花火が打ち上げられる。これについて青海省や中国の東北地方、武漢など、各地の中国人に聞いた話によれば、鬼などの悪いものを祓うために行うのだという。それと関連があるか明らかではないが、A村の元宵節の儀礼にも、悪いものを祓う行為が儀礼を構成する要素の中に含まれている。ちなみに、神柱を用いた元宵節の儀礼はA村に特有のものではない。前回記事で事例報告を行った3つの村は当然、その他の村でも、神柱を用いた元宵節の儀礼が行なわれている。

以下、A村の関帝廟における元宵節の儀礼について事例報告を行う。その際、漢族の一般家庭における元宵節の行事も含めて事例報告を行う。そうすると元宵節に行なわれる行事や儀礼の目的がより明確になると思う。事例報告は時系列で記述する。なお、参与観察は2011年2月17日に行い、その際、A村の漢族であるD氏の家でお世話になった。D氏の家はD氏、D氏の父、D氏の母、D氏の子の4人家族であり、以下に記述する一般家庭の事例はD氏の家のものである。また、参与観察における筆者の立ち位置についてだが、D氏の家で参与観察を行なった際は、行事を取り仕切るD氏の父の背後について廻り、調査を行った。また、関帝廟での参与観察では、法師が登場するまでは祈祷や礼拝を行う参加者の邪魔にならない程度に境内や廟内を歩き回りながら、参加者および周囲の様子について調査を行った。法師が登場してからは、写真撮影および自由行動はD氏やA村の人々に制限されたため、参加者の動きに従いながら、その様子を調査した。

#### D氏の家における元宵節の行事

[~19時]

D氏の母が台所で夕食を用意する間、D氏、D氏の父は、お茶を飲み、数種類の豆や果物等の種を炒った点心を食べ、テレビを観ている。

[19時～19時30分]

D氏の父がシッカと称される香木の枝先に火をつけ、それを持ちながら家の中を歩き廻る。家の中を歩き廻りながら、シッカから立ち昇る煙を家の中に充満させる。そして、歩き廻った際に家の中に落ちたシッカの灰を箒で玄関の外に吐き出す。D氏の父によれば、これは家の中の悪い物を外に出すことを意味する。その後、玄関先で爆竹を鳴らし、悪いものを追い払う。なお、シッカの学術名称は不明であり、今後の調査で明らかにしたい。

[19時30分～20時30分]

家族全員で夕食をとる。メニューは豚肉の脂身の炒め物、羊肉とセロリの炒め物、青ピーマンと羊の頬肉の炒め物、蒸しパン、揚げパン、白飯である。A村を含めた地域一帯では、重要な行事があったり大切な客人をもてなしたりする際に、豚の脂身や羊肉を用いて料理を作る。白飯もまた日常的に食卓にあがるものではなく、上記したような特別な日に食すものである。

#### 関帝廟における神柱の正月儀礼

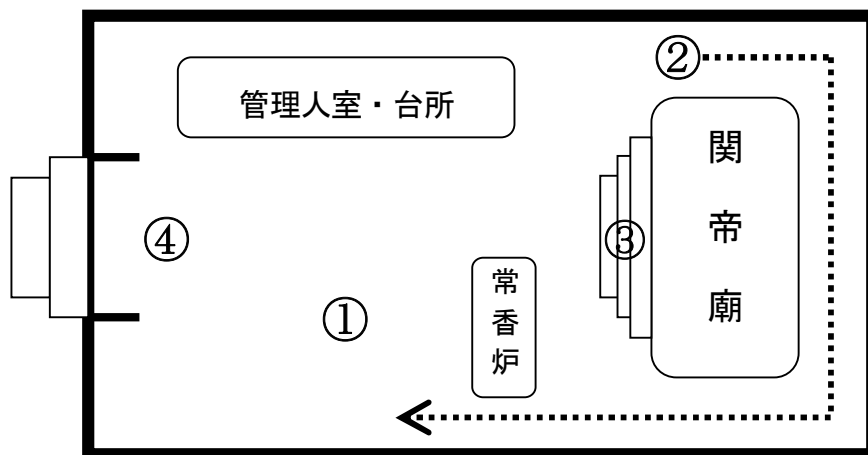


図1 関帝廟の境内と建物の位置関係 (※廟の囲いはおよそ縦5m、横10mである)

[20時30分～21時15分]

D氏とともに関帝廟に行く。途中、D氏が手に持っている小さなヤカンと空のペットボトルについて聞くと、儀礼に使用されるお湯を持って帰るのだと答えた。廟に集まっている人はまだ少なく、法師も不在であった。儀礼が開始されるまで、参加者は廟内の関羽像やその他の像に線香をお供えし、五体投地<sup>6</sup>を何度も行う。また、境内で太鼓や鐘を鳴らす人、花火をする子供たちなどもみられた。そのうち、参加者は廟内から出て境内に集まり、法師の登場を待つ。

[21時15分～]

法師が大きな神柱を右手に持って廟外に現れる。境内にいる参加者は法師の動きを見つめている。筆者はそれまでジッと廟内を見つめていたつもりだったが、法師がどこから姿を現したのか、全くわからなかった。法師は神柱を激しく震わせている。何故、法師はあのよ

うに震わせているのかと隣にいた男性に聞けば、そのようにしないと、神が神柱に依りついたことを人々が信じないのだという。これは村人全員の認識ではないだろうが、なかにはそうした認識を持つ人もいるということである。残念なことに神柱に依りついた神格を確認しなかった。これについては今後の調査で確認したい。

参加者は廟の横に置いてある水の入った大きな釜を、あらかじめ用意しておいた木で組んだ台の上に置き（図1の①の位置）、シッカを燃料に湯を沸かし始める。釜の中にもシッカの葉や枝が入られる。そうして沸かした湯は儀礼の後で参加者に分けられる。儀礼後、D氏の父に聞いた話では、これで顔や手を洗うと病気や事故に合わず安全でいられるのだという。湯が沸くのをみんなで見守る。その間、法師と神柱は廟内に姿を消す。参加者は線香の束に火をつけ、集まった人々に1本1本手渡ししていく。その線香を持ちながら、参加者は湯が沸き、神柱と法師が再登場するのを待つ。

[21時48分～]

廟の管理人が長さ約1m、幅約80cmの大きな赤い旗を廟の右側から左側（図1の②の位置）へ移動させ、その後、使用するときのために境内を囲う石壁に立てかけておく。

[21時50分～]

大きな神柱を震わせながら、廟内から再び法師が参加者の前に登場する。法師は廟の階段を下りて釜の近くに寄り、釜の上で神柱を震わせながら円を描くように何度も廻す。儀礼後、D氏の父に聞いた話では、これは釜の湯に霊力を与えるためであり、霊力が与えられていない湯を用いても意味がないという。さらに法師は湯の中に手を出し入れする。次に早足で廟内にすばやく戻ったと思ったら、今度は廟の出入口にすばやく移動し（図1の③付近）、そこから駆け足で境内の外に出るかと思いきや、境内の出入口付近で止まり（図1の④）、再び廟内へ走って戻る。近くにいたA村の人々に法師の行動の意味について聞くと、そのように動きまわるのは廟内に悪いものが無いかどうか探すためであると教えてくれた。

その後、法師は再び廟の外（図1の③付近）に現れて「釜の湯を持ってきてくれ」と指示を出す。すると人々は廟の左側（図1の②の位置）に、チベット語でチョミ(*mchod me*)<sup>7</sup>と呼ばれる法灯をたくさん載せた大きな板を運び、また、その板の近くに釜を移動させる。そして、チョミを載せた板の向こうに、あらかじめ移動させておいた大きな赤い旗をたてる。参加者が列をなし、チョミを載せた板の下をくぐり始めると、法師は釜に入れたシッカの枝で参加者の頭上から湯をふりかける。儀礼後、D氏の父に聞いた話では、釜の湯を法師がシッカでふりかけるのは家内安全や無病息災を願って行われるのだという。また、古い年を送り、新しい年を迎える意味もあり、チョミを載せた板の下や旗をくぐるのは必ず一度でなければならないという。参加者はその湯を頭や体に受けながら板の下を進み、旗をくぐりぬける。そして、そのまま廟の外側を時計周りに進み、再び境内の広場に戻る。図1の矢印はその進行方向を示したものであり、図2はチョミを載せた板と旗、釜、法師の位置関係、および参加者の進行方向を明らかにしたものである。

[22時～]

廟前の階段の上（図1の③）に立ちながら法師が神柱を激しく震わせ、境内にいる参加者に見せる。参加者はそれに向かって五体投地を何度も繰り返す。

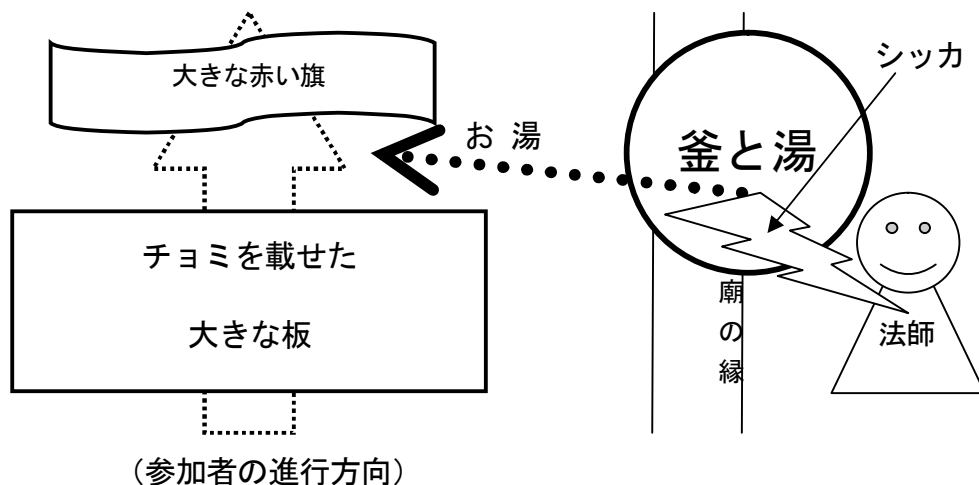


図2 チョミを載せた板と旗、釜、法師、および参加者の進行方向との位置関係

[22時07分～]

神柱も法師も廟内に姿を消し、儀礼は終了となる。「境内から出てください」という声が聞こえる。参加者はぞろぞろと家に帰るが、若者は村の集会所で行われるダンス大会に参加する。D氏は儀礼に用いられた釜の湯をヤカンとペットボトルに入れ持ち帰った。翌朝、D氏の家族はその湯で顔を洗っていた。

以上の事例報告から、A村における元宵節の儀礼が湯を用いて清めや祓いを行い、家内安全および無病息災の祈願を目的とするものであることが明らかとなった。また、神柱は神の依代となり、湯に霊力を授け、廟や境内の悪いものを祓う役割を担っていることが明らかとなった。ここから、神柱の役割として次の3点が指摘される。すなわち、第一に神の依代、第二に霊力の授与、第三に祓である。

また、前回事の4-2で報告した元宵節の儀礼の内容と、本稿での事例報告には相違がみられる。前回事には「法師は人並はずれた力を人々に示すため、湯の入った鍋の中に石を投げ入れ、それを素手で取り出す。その後、儀礼棒を持ち、人々の身体を叩いてまわる。」(上原2007: 52)とある。確かに法師は釜に手を出し入れたが、石を投げ入れることはしなかった。また、神柱で参加者の身体を叩いてまわることもしなかった。ただ、この相違については各時代における儀礼内容の変遷やそれに絡む話者の記憶違いという問題も考えられるため、ここで簡単に誤りとするのは速断だと思われる。これについては今後の調査で明らかにしたい。

### 3-2. 儀礼における法師の位置づけ

神柱同様、元宵節の儀礼において注目すべきは法師の役割である。何故なら、次のような疑問が生じる。すなわち、神柱が依代であることは確かだが、神柱を手にして儀礼の流れを司る法師はどう位置づけられるのだろうか。法師もまた神柱同様、依ましとして神霊と交流しているのだろうか。それを検討することは、儀礼における神柱の役割をより明確にすることにつながる。また、A村の神柱のように儀礼に用いられる棒や柱などにはシャーマンが関与する事例が多くみられる<sup>8</sup>。したがって、ここで元宵節の儀礼における法師の役割を検討することは、

A村の神柱の学術的位置づけを定めるにおいて今後、重要な要素となるだろう。そこで、元宵節の儀礼に関する法師の話から、その問題について考えてみたいと思う。

法師であるC氏は、儀礼や行事のなかで法師自身に直接神が降りることは無く、託宣を行なうこともないと述べる。ここで2011年2月17日に行われた元宵節の儀礼に関するC氏の話の提示しよう。

「儀礼の際に廟内を歩き回っていたのを自分は知らない。釜の湯に手を入れていたのは、何か災難を洗っていたのだと思うけれど、自分には記憶が無い。熱いかどうかもわからない。神柱が自分にやらせていたことだ。神柱を持って動いていた間、自分は記憶が無い。」

D氏の父もまた「(神柱が)震えているのは法師が神柱を動かしているのではなく、神柱が自分で動くのだ。法師に動く自由はない。」と述べ、関帝廟の管理人も同じことを述べていた。これらの話からは儀礼の際、法師であるC氏が神柱をコントロールしているのではなく、逆に神柱がC氏をコントロールしているとA村では信じられていることが指摘される。ただ、儀礼の際、実際に動くのは法師であり、それによって神意が目に見える形で外部に表現される。したがって、元宵節の儀礼において法師は、神を降ろす直接の依ましとはならずとも、神柱を媒介として間接的に神意を表現する存在であると言えよう。さらに、ここから法師がシャーマンとして位置づけられるかについて考えてみたい。佐藤憲昭はシャーマンを次のように定義する。すなわち「(前略) 霊的存在(神霊・精霊)と直接交流をしながら、役割を果たす呪術・宗教的職能者はシャーマンと呼ばれる。(中略) シャーマンが他の職能者と区別される場所は、予言、託宣、祭儀、治病など役割を果たすとき、神霊と直接交流をする点にある」(佐藤 2009: 468-469)。この定義に照らして考えると、法師は神霊の直接的な依ましではないことから、シャーマンとして位置づけることにはやはり疑問が残る。ただ、依代となった神柱を神霊的な存在として見るならば、シャーマンに類似した存在として法師を位置づけることは可能だろう。しかし、この問題に明確な回答を与えるには、法師と神柱の間における霊的な交流の有無に関する調査が必要であり、その結果を踏まえた上で法師の位置づけを再検討すべきだと考える。

#### 4. おわりに

ここまで中国青海省A村の漢族による元宵節の儀礼について事例報告を行い、その儀礼における神柱の役割について分析・考察を行った。A村の関帝廟における元宵節の儀礼は清めおよび祓いを目的とした活動であり、その儀礼において神柱は神の依代として、湯に霊力を授け、廟や境内の悪いものを祓う役割を担っていることが明らかとなった。さらに儀礼を司る法師の役割についても検討し、法師が神柱を媒介として間接的に神意を外部に表現しながら儀礼を司る役割を担うことから、シャーマンに類似した存在として位置づけた。以上、A村の漢族による元宵節の儀礼における神柱の役割は、神の依代、霊力の授与、祓であることが明らかにされた。

では、神柱の役割を踏まえ、前回記事における神柱の特徴を再検証し、更新したい。神柱の特徴について、前回記事では「その形態は手持ちで使用することの出来る範囲の大きさに作られた多角柱の棒に布を着せたものであり、特に病気の治癒儀礼の際、法師と称される民間宗教者によって臨時的に用いられる道具である。」と述べた(上原 2007: 53-54)。形態に関する「多角柱」という記述は、多角形の間違いだらう。また、治癒儀礼の際、法師は必ずしも必要では

ないことは前述のとおりであり、シャーマンとも明確に位置づけられない存在を民間宗教者とするのは速断だろう。さらに、天候をコントロールする儀礼や元宵節の儀礼、関帝廟の祭日行事についても前回記事では触れたが、治癒儀礼に関する言及しかない。そこで、前回記事に記載した神柱の特徴を、本稿では次のように更新する。すなわち、「その形態は手持ちで使用可能な範囲のサイズに作られた多角形の棒に布を着せたものであり、天候のコントロールや病気治癒の儀礼、元宵節の儀礼、春や秋に行なわれる関帝廟の祭日行事の際に用いられる。それらの儀礼や行事の際、神柱を用いるのは法師と称されるシャーマンに類似した存在であるが、治癒儀礼では必ずしも法師が用いる必要はない。また、元宵節の儀礼において神柱は次の役割を担う。第一に神の依代、第二に霊力の授与、第三に祓である。」とする。

最後に、上で更新した神柱の特徴を踏まえ、前回記事の先行研究に関する指摘を再度検証する。前述のとおり、前回記事では中国の少数民族に伝わるものと相違点の多いことを指摘した（上原 2007: 46-48）。ここで、前回記事で提示した中国の少数民族における各事例内容を再確認する。タイ族の事例における神柱は家神を代表するものであり、その家の男女の祖先とされる。柱には王子柱と公主柱があり、その上で遺体を洗った事例もみられる（章 2001: 58、高主編 2001: 198）。モソ族の事例における女神柱は、各戸の囲炉裏に立てられている。13歳で成人を迎える女性の通過儀礼の際、女神柱の側で母親が娘に新しい衣服を着せる（劉編著 2000: 182）。土族の事例における神柱は未亡人、あるいは鰥夫の棺桶ともに墓穴に入れられるものである。その形態はT字型であり、Tの横長の部分には故人の名前が書かれる。この柱の墓穴への移動は、先祖の魂の移動を象徴しており、すなわち神柱は魂の依代として用いられる（Stuart and Hu 1992: 77）。以上の各事例は、用途や使用される場面に相違があるが、どれも祖先信仰との関わりが認められ、また通過儀礼に使用されるという共通点が指摘できる。ただ、神柱の特徴と比較して、現段階でそれらの共通点は神柱の特徴にはみられないものであり、役割に関して土族の事例との共通点が指摘されるのみである。したがって、「かなりの相違がみられる」（上原 2007: 48）という前回記事の先行研究に関する指摘は、とりあえず保留にしておきたい。

それにしても、なぜ用途などが異なる複数の事例に対し、中国語で「神柱」という同じ名称が使用されているのだろうか。この問題は今後、文献渉猟を行なう上で考えなくてはならないだろう。それには複数の要因が考えられる。例えば、各民族言語による民俗語彙が中国語に変換される際、「神に関する柱」という単純な意味において「神柱」という言葉を同様に与えられた可能性が考えられる。あるいは中国の学術用語として、神信仰に関わる柱や棒の意味で使用される「神柱」という語彙があるのかもしれない。しかし、どちらにせよ、そうした可能性を考慮すると、「神柱」という名称を中心とした文献渉猟は不十分であり、機能や用途など、信仰内容の本質に関わる部分に着目した文献渉猟が必要であることが指摘される。例えば「北方薩滿祭祀儀礼の構造形態—以鄂倫春族“春祭”和滿族“家祭”为主要考察対象」（黄 2001）では、A村における漢族の神柱と同じように神の依代として機能するものを、中国語で「神灵凭依的“物”」（黄 2001: 273, 274）と表記している。そうした中国語による多様な表記にも配慮する必要があるだろう。ゆえに、前回記事の先行研究に関する指摘の再検証以前に、実は先行研究の提示自体が全くの不十分であったことが指摘される。先行研究については再度、文献渉猟を行い、再検討したいと考える。

今後の展望としては、まず文献を再渉猟し、先行研究の再検討を行う。また、本稿の事例報告で調査不足とされた箇所についての再調査を行う。また、A村において元宵節の儀礼以外の儀礼に関する参与観察および聞き取り調査を行い、漢族による神柱への信仰内容をさらに明ら



かにしたい。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、多くの方々にご指導、並びにご協力を頂いた。とくに中国青海省A村のD氏のご家族様、並びにA村の方々には様々な面でご協力を頂いた。忙しい合間を縫い、同行してくださった通訳者の方々にも本当にお世話になった。また、査読者の方々には豊富な知見によるたいへん有意義なご意見を頂いた。本稿では査読の方のご意見の全てを反映することは叶わなかったが、それらは今後の調査、研究を進める有用な指針となるはずである。ここで多くの皆様方に感謝の辞を述べる。

## 注

- 1 東北地方で家の神としてまつられている多くは一对の木偶。青森・岩手の両県に分布が多く、山形県ではオコナイサマ、福島県ではオシンメサマともよんでいる。木製が一般的であるが、宮城県や山形県には竹製のものもある。長さは30cm前後で一尺が基準とも考えられる(三崎 1999: 259)。
- 2 中国三国時代の蜀の武将である関羽を中心神格とする廟。
- 3 チベット族は山をジツタカ (*gzhi bdag*) と称し、土地神として信仰する。
- 4 一般の僧侶ではなく、チベット仏教の仏神が転生した存在。チベット語でラマ (*la ma*) と言う。
- 5 中国の農曆は基本的に12ヶ月で1年とするが、月の満ち欠けに従って月の日数を決める。また、1年の全日数が354.3667日となり、太陽の回帰年(365.2422日)と誤差が生じるため、3年毎に閏月が加えられる(斬一石 2000: 9-10)。
- 6 両手、両膝、額、つまり五体を地面に投げ出して行なう礼拝方法。
- 7 チベット仏教の儀礼等で使用される法灯のこと。直径5cmほどの金属製の小さな器に溶かしたバターや油を入れ、火を灯す。
- 8 儀礼に用いられる棒や柱、木偶等にはシャーマンの関与がみられる事例が非常に多い。例えば、イニセイ族のシャーマンの錫杖(フィンダイセン 1957(1977): 102-103)、アイヌ民族のツス(和田 1976: 218)、韓国の巫女の鳥神竿(柳 1976: 39)、オロチョン族のシャーマン儀礼に用いられるトゥル(王・関 1999: 98)など枚挙に暇が無く、またそれらはどれも神の依代とされる。

## 参考文献

フィンダイセン/和田完訳

1957(1977)『霊媒とシャーマン』冬樹社。

斬一石編著

2000『袖珍实用万年历』金盾出版社出版。

黄強

2001「北方萨满祭祀礼仪的构造形态—以鄂伦春族“春祭”和满族“家祭”为主要考察对象」『萨满教图说』(黄強・色音編著)、247-279、民族出版社。

三崎一夫

1999「オシラサマ」『日本民俗大事典 上』(福田アジオほか編)、259-260、吉川弘文館。

王宏剛・関小雲/黄強・高柳信夫訳

1999『オロチョン族のシャーマン』第一書房。

劉学朝編著/朱新建・王武雲訳

2000「女人国—中国雲南省秘境瀘沽湖摩梭人母系大家族の実像」『愛知学院大学教養部紀要』第48巻第3号: 175-206。

才让

1996「藏传佛教中的关公信仰」『中国藏学』1996年第1期: 80-87。

佐藤憲昭

2009「シャーマニズム」『文化人類学事典』(日本文化人類学会編)、468-469、丸善。

章立明

2001「傣族文化当代变迁的思考」『中央民族大学学报』第4期総第137期: 55-60。

Stuart, Kevin and Hu Jun

1992 Death and Funerals among the Minhe Tu(Monguor). *Asian Folklore Studies* Vol.51, No.1: 67-87.

上原周子

2007「中国青海省海東地区化隆回族自治県における漢民族の儀礼棒に関する事例報告」『北海道民族学』第3号: 46-56.

和田完

1976「アイヌのシャーマニズム」『シャーマニズムの世界』(桜井徳太郎編)、215-231、春秋社.

柳東植

1976『朝鮮のシャーマニズム』學生社.

哲伦旺多

1994『藏汉英对照小词典』民族出版社.

参考サイト

The online Tibetan-English Dictionary (<http://www.eng-tib.com>)

(うえはら・ちかこ／北海道大学大学院文学研究科 専門研究員)